令和３年度第３回　仙台市若林区区民協働まちづくり事業評価委員会
議事録

1　日時

令和４年３月 18 日（金）　15 時 00 分～16 時 45 分

2　会場

若林区役所４階第２、３会議室

3　出席（名簿は次第裏面のとおり）

(1) 評価委員

(2) 事業担当課

家庭健康課、区民生活課、まちづくり推進課

(3) 事務局

まちづくり推進課

4　傍聴者　なし

5　議題

令和３年度企画事業の事後評価について

※　評価は事業ごとの質疑応答及び意見交換をもって行う

6　配付資料

(1) 令和３年度企画事業実績概要報告書　　※評価委員へは事前に配布済み

(2) その他関連資料、成果物

7　経過概要

(1) 開会

(2) 委員紹介

(3) 令和３年度企画事業実績概要報告

☞　各課で事業ごとの写真等を投影しながら、実績概要報告書に基づきポイントを報告。　その後、質疑応答・意見交換　　別紙参照

(4) 閉会

別　紙

令和３年度企画事業に関する質疑応答及び意見交換　記録

委＝評価委員　　担＝事業担当課

1　若林区安全安心街づくり活動推進モデル地区事業
担当：区民生活課

委　実績概要報告書において、今後の事業展開として「町内会、防犯協会、交通安全協会などから課題や事業要望を聴取の上、啓発活動や各種講座を実施していく。」との記載があるが、町内会、防犯協会等は「守る側」であり、学校は「守られる側」にあるので、守られる側の意見も聞く機会があればいいと思った。町内会、防犯協会等が動きやすい時間帯はどうしてもあると思うが、学校側で対策してほしい時間帯とズレが出てきてしまうこともあると思われる。その点からも、守る側と守られる側の意見交換の場があると、今後より発展して、地域全体の取り組みに繋がるのではないか。

担　防犯パトロールを行うにあたり、事前に学校のほうに生徒の下校時間を確認し、時間を合わせるようにはしていたが、今後は連携の密をさらに深めて事業展開をしていきたい。

委　当事業を 3 年間実施して、不審者事案が数字として減っているのか教えていただきたい。

担　定量的な件数は調査をしていないが、不審者事案が発生した際には、警察署から区民生活課へ連絡が来る。その件数で言うと、3 年間のうちモデル地区において不審者事案が発生したとの連絡はなかった。

委　安心安全というと、防犯に目が行くが、次年度からの取り組みには交通安全協会が入っているということで、交通安全の面も含めて事業展開を考えていらっしゃることが読み取れた。現状、モデル地区において、防犯だけではなく交通安全関係の課題はないのかお伺いしたい。

担　平成 15 年に、エリア推進会議という区独自の事業を展開していた際には、防犯と交通安全も行っていたが、平成 25 年度に、本庁に自転車交通課ができ、防犯と交通が本庁の中で別れたかたちになった。その中で、安心安全に交通の部分も含めていいものか、担当者レベルでも揺れている部分がある。薬師高砂堀通りが発会するときには、防犯メインと説明はしているが、交通の要望もある。今後この部分については、整理をしていきたいと思っている。

委　高齢者の徘徊が月に数件報告されており、また、高齢者が自転車で転ぶなどの交通事故も発生している。是非、今後は児童・生徒だけではなく、高齢者の見守りにも目を広げていただきたい。

担　確かに、最初から児童・生徒さんへの見守りというバイアスがあったので、今後は地域包括支援センターや関連団体との情報交換もさせていただいて、是非高齢者への側面についても組み入れて参りたい。

2　若林区健康づくり区民会議
担当：家庭健康課

質疑なし

3　六郷健康づくり事業
担当：区民生活課

委　六郷地区は乳幼児期・学齢期において肥満の割合が多いとのことであるが、その原因はどこにあるのか。紙媒体での啓発等をしても、食事を作るのは親御さんなので、親御さんには届いているのか。本来六郷は野菜が多い地区なので、肥満とは繋がらないイメージであるが、実際の家庭では、片親で時間がなくインスタント食品を食べる頻度が高いなど、地域の家庭事情の影響が大きいのではないか。原因と対策というところで、手法をどのように考えているのか教えていただきたい。

担　六郷地区は、3 世代で生活している家庭が多く、親御さんが気を付けたいと思っても、祖父母が甘いものをあげてしまうといったような状況であるというのは、色々なところで聞き取りをしていると、見受けられる。貧困世帯数についての調査は出来かねているところであるが、漬物や煮物を作る習慣が根付いており、塩分の摂取量が高い傾向にあることは把握している。具体的な手法についてだが、乳幼児期には検診で必ず来所するので、その際に生活リズムや食事の面について聞き取りを行い、気になる点があれば二次設問をするようにしている。また、児童館で低学年の児童が集まってくる機会があるので、若林区健康づくり推進キャラクターわかちゃんを起用した、「わかちゃんすごろく」を作り、モデル事業として六郷地区を含め数ヶ所に配布し、生活習慣病について遊びながら学べるよう工夫している。小学校の授業で生活習慣病について学ぶ際には、授業のための媒体等を作成し、先生方と協議しながら行っている。また、働き盛りの親御さんたちと接する機会を持ちたいということも話し合っており、授業参観の開催や、集まった際に親御さんのワークショップを出来ないかと考えている。その他、町内会や体育振興会にも働きかけている。

委　学校、市民センター、児童館、幼稚園など幅広い地域の団体と連携されていて、素晴らしい取り組みだと感じた。伝えたい保護者に限って、授業参観に来ないという傾向はあると思うので、就学時の健康診断や、その前に行う子育て講座など、やむを得ず全員が来る機会を活用されるとよろしいのではないか。

委　先日、生活習慣の差で、40～80 歳でかかる費用に 5,000 万円の差が出るという記事を見

た。生活習慣は痛みや苦しみがあるわけでもなく、放置されがちなので、お金の流れを例に説明してみるなど、聞いている方たちの興味を引くような切り口で説明することが重要になってくると思う。

担　可視化してお伝えするということは意識しているが、血圧などマイナスイメージのものだけをお伝えしても、その地域でずっと元気に暮らしている方たちには伝わりにくく、また、一番伝えたい方に伝わっていないということも課題としてあったので、その方にとっての得になるような情報を交えつつ、伝えていけるよう工夫したいと思う。

4　若林区民ふるさとまつり
実施：若林区まちづくり協議会
担当：まちづくり推進課

委　広報が不足したように感じたとのことだが、どのような方法で広報したのか。

担　市政だより 9 月号掲載、区内各施設・学校・店舗へのチラシ配布、東西線全駅のイベントボードへ 1 か月間ポスター掲載、ラヂオはいらいん若林での宣伝や、仙台市ホームページへ掲載した。

委　ふるさとまつりの目的として、区民協働によるコミュニティづくりを目指すというところがあるとのことだが、オンラインでの開催で、どのような形でコミュニティづくりを実現しようとしたのか。

委　人を集めることが難しい中で、コミュニティづくりのために人と人との接点をつくらなければならないという矛盾をどう解決しようかと悩んだ結果のオンライン開催となった。期間を長く設けたスタンプラリーや、オンラインステージ発表、幼稚園・保育園の作品展など、人同士の接触を最小限に抑えたコミュニティづくりを意識した企画を開催した。

委　特設サイトをアーカイブとして残していたほうがいいのではないかと思ったが、各団体に動画を提供して頂く上で、期間限定での公開というのは条件だったのか。

担　ランニングコストの部分と、セキュリティの部分で長期間での公開は難しいと判断した。また、レア感を出したいとの狙いもあった。

委　オンラインというのは初めての試みだったとのことだが、開催した結果どのような影響が生まれたのか、変化を把握していたらお伺いしたい。

担　ネットに全く関わりがない方、Web を理解していない方にイメージは掴んでいただけたと思っている。そういう方々を巻き込んでサイトを作成したので、次年度以降、オンラインの要素も何らかのかたちでまつりに入れ込んでいきたいという意見も、実行委員会内で上がっている。

委　スタンプラリーに協力した店舗からのアンケート結果はあるか。

担　参加者の方から、「今まで気になってはいたが入れなかったお店に行けて、買い物して、食べて、これからまた行きたいお店になりました」との声をいただいている。全体的に、スタンプラリーに参加した方からは好感触な反応が多かった。

委　アクセス数はどのくらいあったのか。

担　10 月末までで、4,364 回であった。

5　地域メディアの活用による＜新しい地縁＞創造プロジェクト（ラヂオはいらいん若林）
実施：若林区まちづくり協議会
担当：まちづくり推進課

委　実際に、当番組を区内で聴いている方はどのくらいの割合いるのか。また、新しい若手が入りつつあるとの話であったが、若手だけでなく高齢の方の人脈やアイディアもあり、どのようにスタッフの方々の報酬、継続を考えているのか。

担　聴取率に関して具体的な数字は把握していないが、少ないということはずっと言われている。番組として一方通行であり、皆さんにどう届いているかということは、我々のほうで把握は難しい。今後は双方向での発信となるよう、クイズや景品など、聴取者がリアクションを取れるような工夫が必要だと考えている。スタッフに関しては、公募を考えていた時期もあるが、どのような方が応募されるのか把握できなく、過去に問題が発生したこともあったようなので、人づてでのスタッフ勧誘のみ現在は行っている。ラジオに限らず、まち協の事業そのものが過渡期に来ており、若手参入については大きな課題だと受け止めている。

委　継続する仕組みについて色々考えなければならない時期になっていると思う。これだけ充実した内容の取り組みを無償でしてもらっているというのはすごく気になった。やはりまちづくりはパワーだけでは難しいところがあるので、例えば、交通費を出してあげるとか、そのときの食事代は経費で出すというものがないと継続できないようにも思う。現在まで継続できているのは、皆さんの人柄や、まち課さんのサポートの在り方で、苦労ばかりにならない絶妙なバランスで成り立っているからだと思う。それも継続させる上で非常に不安定な要素だと思うので、そのあたりを例えばお金の面で支えてあげるなど、何か方法を検討していただきたい。また、新しい人を入れると

ころのためらいを今一度皆さんでお話されてもいい時期だと思う。先人たちが築いてきた大きな功績を、次の世代にどう繋いでいくのかというところはすごく大事なところであるし、上手く引き継げないまま途絶えてしまうには非常にもったいない事業だと思うので、是非積極的に踏み込んだ、今後の継続性を含めた体制作りをご検討いただきたい。

担　メンバーの方たちのラヂオはいらいんへの思い入れが強く、その思い入れに我々が甘えている部分も確かにある。しかし、思い入れがあるからこそ現状を変えられない部分もあるとは思う。報酬というかたちでのお渡しはしていないが、費用弁償に関しては、最低限我々のほうでカバーできる部分はカバーしている。

委　ラヂオはいらいん若林を知らない方々は非常に多いと思うが、周知方法はどのように行っているのか。また、高齢者の方たちは、ラジオを聴く方が非常に多く、愛着を持っている方が多いので、区内の高齢者施設でかけていただいたりすると、入居者の方たちも喜ぶと思う。

担　コミュニティＦＭなので、出力が弱く、全エリアをカバーできているかというと、聴きづらい地域があるのが現状である。ただし、リスラジというサイトでラジオ３を選べば聴取可能であるが、高齢者の方々はなかなかそういった操作が難しいので、そこは考えていかなければならないと思っている。広報に関しては、ホームページや会報でご紹介をさせていただいている。施設での放送については、今後検討していきたい。

6　若林区合唱のつどい
実施：若林区まちづくり協議会・合唱連盟わかばやし
担当：まちづくり推進課

委　合唱のつどいは若林区の大切な文化的な行事であるので、出来るだけ継続していただきたいとの想いはあるが、このコロナ禍でどのような方法があるのか慎重に吟味していただきたい。また、コロナで活動できないあいだに、ラヂオはいらいん若林の番組内で、各学校の合唱や学校紹介を行うことで、聴取者の年齢層を広げることにも繋がるのではないか。

委　今年度は区民ふるさとまつりの代替イベントをオンライン開催したとのことなので、その中に合唱を組み込んだり、ラヂオはいらいん若林のほうで紹介するような企画があればよかったと思う。コロナが何年も続き、継承されなくなることが怖いので、複数個所で紹介するような場を設けていくというのは、様々連携して考えていっていただきたい。

担　各学校で、記録用に動画は撮影していると思うが、公開用に撮影しているわけではないので、その映像をオンラインまつりで公開したいとなると、写っている児童生徒全員の承諾が必要になる。そのため、現実的に学校から映像をご提供いただくのは難しい。また、今年度は緊急事態宣言で施設が閉まり、新たに動画撮影をしようとしても場がなく、その点でも行き詰まってしまった。
合唱のつどいは、継承が難しい時期に差し掛かっている。コロナをひとつのきっかけとして、どう変えていくのかは、今後我々が考えていかなければならないことだと思っている。

委　確かにラヂオ等で合唱を配信してほしいという気持ちはあるが、合唱のつどいの方々は、このコロナ禍で練習が出来ないということに 1 番悩んでいると思われる。先ほど事務局がおっしゃっていたとおり、合唱として継続していくのか、新しいものにするのか、コロナ禍での事業というものを考えていかなければならないと思う。コロナを前提としつつ、どうにか合唱ができる仕組みを構築しない限りは、これまでどおりの活動は練習段階から難しいのではないか。そのあたりを工夫しつつ、継続性があれば継続し、難しければ判断が問われるところだと思う。

7　若林区魅力発信事業（若林わくドキまち歩き）
実施：若林区まちづくり協議会
担当：まちづくり推進課

委　何名の方が参加されたのか。また、抽選の倍率はどれほどか。落選した方には何か対応はあるのか。

担　荒町のときは 76 名の応募があり、参加者は 10 名とした。六丁の目は荒町よりも倍率が低かった。落選した方にはその旨をハガキで通知した。

委　どれくらいの時間をかけてまちを歩くのか。

担　基本的に 2 時間かけて歩く。

委　ガイドを外部にお願いしたとのことだが、誰にお願いしたのか。また、ガイドの選定基準はあるのか。

担　荒町は「風の時編集部」の編集長である佐藤正実さんに、六丁の目は、「七郷語り継ぎボランティア郷浜（さとはま）」の大泉貞二さんにお願いをした。また、地域の方にサブガイドを依頼し、各箇所でお話して頂くということもした。選定基準は具体的に設けていないが、コースを検討したときにそのコースに合った方を選んでいる。

委　まち歩きが最終的にどこに向かっていけばいいのかを考えたときに、ただガイドから

学んで終わるのではなく、学んだものをまた誰かに伝えるという循環を作っていってはどうだろうかと思う。私が以前京都のまち歩き「まいまい京都」に参加した際に、関西人は非常に弁が立つので、喋ることが好きな人が多いということを感じた。それに比べると、やはり東北人は口が重い傾向にあるので、ガイドになられる方は限られてきてしまう。そうなると、特定のガイドだけで回すことになり、街の魅力を伝えることや広がりが難しくなってくる。そういった中で、例えば家族や友人で、まち歩きで回ったところを回ってみるとか、学んだことを自分の言葉で伝えていくような流れが出来てくると、まち歩きも小さい単位で広がっていくのではないかと思う。ガイドさんに頼るだけのまち歩きではなく、自分たちで自発的に歩いてみませんかという問いかけをしてみたりすると、新しい展開が見えてくるようにも思う。

委　毎年わくドキまち歩きを継続して実施されており、毎回のまち歩きを確実に実施するというノウハウは既にあると思うので、ある程度外部の人に任せてイベントを実施して、事務局のほうは、次の担い手を育てたり、伝えるということに注力するような、前段の仕組みづくりのほうにステップアップしてもいい時期なのではないかと思う。まち自体がオーバースケールになっていて、集団で歩くには危なかったり、歴史が見えづらくなっている中で、若林区は貴重なまち歩きが出来るまちだと思うので、どんどん企画が出来るように仕組みづくりを考えていただきたい。

担　ごもっともな意見である。しかし、古くからのメンバーには、まち歩きはこういうものなんだという概念を持った方もおり、なかなかステップアップしていくことが難しい。新たな手法が必要だとは思う。

委　やはりメンバーの年齢層の高さが目立つ。例えば、初めて進学で若林区に入った子たちが面白いと思うようなところを紹介するなど、もう少しラフな感じでもいいのではないか。そういったアイディア出しを含めて、もうちょっと気軽にできるようになればいいと思う。若林区は、魅力を感じて力を提供してくれる素晴らしい人材がいるので、それを継続させるためにやはり世代交代という課題の解決は、是非頑張っていただきたいところである。